

駒澤書



第36号

発行日：
2026年3月15日
発行所：
株式会社エヌワイケー
〒154-0012
世田谷区駒沢5-7-6
電話：
03-3704-8391
FAX：
03-3703-7121
発行人：
横山和俊

所長のひょうぎ

仲春の候、皆様におかれましては益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。平素は弊社取り扱い各紙をご愛読いただき誠にありがとうございますと存じます、所長の横山です。

印刷、折込の関係でこの「駒澤書翰」は1週間前には印刷業者へ入稿しなければなりません。そんな締め切りの間近の今月7日の朝刊前。当日は朝刊の時間帯のみ雨予報。先に店着した毎日新聞の仕分けも終わりの、日経新聞の店着を待っていると、無情にもぽつぽつと雨が降り始めました。諦めのため息と共にいつい天氣予報を恨みます。気持ちを切り替え先に店着している毎日新聞をめぐっていると、気になる見出しが目に入ります。配達後忘れずチェックしなければと思い、カッパをはおり雨の中バイクで配達に向かいました。3月7日付毎日新聞オピニオン、専門記者・栗原俊雄氏「ラム「現代をみる」から「戦後世代の戦争責任と反省」を紹介します。

第二次世界大戦では、日本人だけでも300万人以上が亡くなった。あの戦争は今日に至るまで、「対等」とは到底いえない日米関係など、国際社会における日本の地位にも大きく関わってきた。二度とそんなことが無いように、世代が変わっても省みて、体験と記憶を継承していかなければならぬ。しかし、そうした「反省」は容易ではない。

94年6月、社会党と自民党、新党さきがけの連立政権が誕生した。3党は「過去の戦争を反省し、未来の平和への決意を表明する」国会決議の採択を目指すことで合意した。しかし内容を確定する作業は難航した。社会党とさきがけが近隣諸国への「侵略」や「植民地支配」を盛り込むとしたのに対し、自民党の案はこれらの文言を入れず、犠牲者への「追悼」を前面に出すものだった。それでも95年6月9日、衆議院で「歴史を教訓に平和への決意を新たにす決議」が採択された。「不戦決議」とも呼ばれる。「決議」は「世界の近代史における数々の植民地支配や侵略行為に思いをいたし、我が国が過去に行ったこうした行為が他国民とくにアジアの諸国民に与えた苦痛を認識し、深い反省の念を表

明する」などとなった。「世界の近代史・・・」のくだりは、日本だけが植民地支配、侵略をしたわけではない、といった「釈明」の響きをもった妥協の決議となった。

村山富市社会党委員長・元首相の「逆効果になるのでは」との危機感が、日本による過去の植民地支配と侵略を謝罪した95年8月15日の「村山談話」につながった。その村山氏が納得できないほど妥協した「不戦決議」であっても、議員の抵抗は強かった。賛成したのは衆議院の定数511のうち、半数に満たない230人。野党の新進党のみならず、与党からも欠席者が出た。参議院では決議すらできなかった。高市早苗首相は当時、強硬な反対派の一人だった。決議に先立つ同年3月16日、外務委員会で「不戦決議」を取り上げ以下のように述べた。「少なくとも私自身は、当事者とは言えない世代ですから、反省なんかしておりませんし、反省を求められないわれもないと思っております。」

私も当事者世代ではない。アジア諸国・地域を侵略していないし、現地の人たちに危害も加えてもいない。「直接的な加害者」として反省を求められたら戸惑う。また、「他人がしたこと」の反省を求められるいわれもない」という感情は自然であり、説得力もあると思う。だが、別の意味で戦争を「反省」し、「戦争責任」を感じることはできるはずだ。過去につながる未来はない。自分には直接関わらない過去を知り、誇るべきは誇り、反省すべきは反省する。近代でいえば、日本はなぜ植民地支配や戦争をしたのかを考え、それによって苦しんだ国・地域の人々の気持ちを想像する。そこから教訓を得て、未来につなげる。それが日本の歴史に連なる者としての責任だと、私は思う。

翌日の8日、日曜日。同じく朝刊前、配送のトラックを待っているところから白いものが舞っています。強風の中、雪が舞っていました。冷たい風に雪降る金沢時代を思い出されました。寒かった朝刊後、熱いシャワーを浴びて朝刊をめぐっているのが気になる見出しを目にします。今回2本目の記事の紹介、編集委員・峯岸博氏の3月8日付日経新聞「ラム」風見鶏「から」首相が語る『責任』の重み」を紹介します。

「首相はいつか『責任』という言葉を使わない」。駆け出し記者だった1990年代、先輩からそう教わった。さまざまな不祥事での閣僚交代をめぐる野党から任命責任を追及されても、どの首相もかたくなに責任論をかわし続けた。任命責任を認めるのはすなわち辞めることを意味するとの不文律があったからだ。しかし、2010年代になると「任命責任は私にある」が急増する。その多くが安倍晋三政権時代だ。閣僚が辞任するたびに安倍氏は野党が拍子抜けするほどあっさり任命責任を認めた。「国民に深くおわびする」と頭を下げ、それで幕引きが図られた。首相は企業の経営者らとは異なる結果責任が特定されるケースは少ない。安倍氏の後継者を自任する高市早苗首相も「責任」をよく口にする。

たとえば「責任ある積極財政」だ。首相は政府債務残高の国内総生産（GDP）比を引き下げると強調してきた。市場の信認を確保する具体的な指標を明確にすることも訴えるが、肝心の衆院選では特に示していない。学習院大の野中尚人教授は「中身を考え方や数字、目標、財源などとセットにして、国民に説明を尽くすのが『責任ある』の言葉が意味する本来の姿だ。それができなければ無責任になる」と指摘。首相が施政方針演説で語った「責任ある日本外交」も言葉が上滑りしていないか。日本の伝統的な友好国であるイランを米国とイスラエルが先制攻

編集後記

最近心がけていることがあります。それは「挨拶」です。例えばレジで会計の時や、外食でホールスタッフが食事を運んできてくれた時など、相手の年齢に関係なく「あしがういっせひます」と声を掛けるようにしています。それが気持ちよく返ってきた日があります。まずは近所のコンビニエンスストアにて。事務作業が続き、口が寂しくなり甘酸っぱいものが欲しくなりました。店頭に並び「種なしカリカリ梅」シリーズを3種類手に取りレジにて会計してもうひとつ、「梅がお好きなんですわ」と声を掛けられました。「私も大好きなんです。これお勧めです。」と私の購入した商品の一つを指さし笑顔で接客してくれました。とても心温まる時間でした。その足で近所のパン屋さん

撃したことで早速、高市外交の真価が試されていく。首相肝いりの「危機管理投資」も同じ響きがある。有事に備えた安全保障の一環としての投資が成長にどうつながるか理解しにくい。危機管理や安保のためと言われると誰も文句をつけにくく、ばらまきで終わる懸念が拭えない。

ハリウッド大学院大の佐藤綾子特任教授（パフーマン心理学）によると、高市首相は環境によってくるる変化する「カメレオン型」の表現がうまくい。それによって「約束を破るのではないか、最後まで責任をとれないのではないかとの疑問がでるのを想定し、先に『責任がある』と答えておくのは世間への予防線でもある」という。大風呂敷を広げても「責任ある」と付けると安心感を与えたり、けむに巻いたりできる魔法の言葉のようだ。今後どう責任を果たしていくのか、その覚悟を聞きたい。できなかった時のことを考えるのは「縮み志向だ」とか「意地悪だ」とか、そう言い返されるだろうか。

自民党が歴史的な勝利を収めた衆院選から約1か月が経ちました。選挙結果に対する考察の記事は興味深く読みました。民意が出た以上、今度はしっかりと政権を監視していかなければなりません。高市首相の発言が少々軽いような気がしてなりません。心配です。

に行きました。たまたま「新作」とプレートが掲げられた商品に興味が湧きました。ただ食べてみたかっただけでレジに持参すると「さすがお客様！お目が高い。こちら今日から発売の新商品なんです」と。たまたまです。しかしそんな言われ方をすると悪い気はしません。気恥ずかしい思いでポイントカードにスタンプを押してもらい職場に戻りました。店員さんとのやり取りを思い出しながらパンを食っていると、温かいものが心にしみてきました。勝手な思い込みですけど、普段の「挨拶」がこの会話を呼び込んだのではと思っっています。これからも心温まるちょっとした時間を楽しめるよう「挨拶」を心がけようと思っ日の出来事でした（よいやま）。